

馬王堆や張家山など出土文献にも記述が見られようにその淵源は古く、東洋医学の重要な一角をなす。それらを、筆者が専門とする気功法を中心として、理論や実践法の概説をしている。

東洋医学は鍼灸療法、湯液療法、養生法を三代柱とするが、従来の東洋医学入門書においては養生法に関する部分が少ない、あるいは省かれてい

ることが多かった。本書は養生法にも十分な紙数を費やしており、これも本書の特徴の一つとして挙げることができよう。

(天野 陽介)

[成山堂書店, 〒160-0012 東京都新宿区南元町  
4-51 成山堂ビル, TEL. 03 (3357) 5861, 2011年  
3月, A5判, 296頁, 3,400円+税]

Gabor Lukacs:

## Extensive Marginalia in Old Japanese Medical Books

本書は、古医書の手書きの書き入れの分析を通して、江戸時代の医師がどのように医書から知識を得たかを調査する一冊である。著者はフランス国立科学研究センターの元研究所部長であり、歴大な古医書を所蔵する愛書家のルカシュ博士である。本書が古医書の書き入れを課題とした理由は、近年西洋では書物史の専門家の間で、書き入れ部分の意味を本文と同等に評価する傾向が見られ、比較研究が熱心に行われているにもかかわらず、コーニツキの名著『日本書物史』など日本の書物についての西洋の先行研究では、手書きの書き入れの意義が無視され、現在まで十分研究されてこなかったからである。著者は日本の書物の二つの特徴によって、西洋の書物と比べ、日本の書物にある書き入れの方が分析しやすいと述べている。一つは、書き入れが本文の配置を守りながら、ほぼ訂正なくきれいに書き入れているので、とても判読しやすい。もう一つは、注釈や書き入れをした人が本文及び書き入れの箇所にも名前、書名、薬名などを明らかにするため、識別記号をよく使った。

著者は本書で中国と日本の古医書8冊を取り上げ、それぞれ現存バージョンのいくつかの手書きの書き入れについて比較調査を行い分析している。本書の構造は次のようである(括弧の中は著者が研究したバージョンの所蔵先である)。

・第1章：陳実功『外科正宗』(著者所蔵, カリ

フォルニア大学ロサンゼルス校ルイーーズダーリング医学図書館所蔵, 北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部所蔵, 日本国会図書館所蔵)

・第2章：滑寿『十四経發揮』(著者所蔵, 内藤記念くすり博物館所蔵, 英国ウェルカム図書館所蔵)

・第3章：谷村玄仙『十四経發揮鈔』(日本国会図書館所蔵)

・第4章：賀川玄悦『産論』(内藤記念くすり博物館所蔵, 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵, 京都大学富士川文庫所蔵)

・第5章：賀川子啓『産論翼』(著者所蔵, 内藤記念くすり博物館所蔵, 英国ウェルカム図書館所蔵)

・第6章：片倉鶴陵『産科発蒙』(著者所蔵, 内藤記念くすり博物館所蔵)

・第7章：杉田立卿『眼科新書』(著者所蔵)

・第8章：虞搏『医学正伝』(米国コロンビア大学東アジア図書館所蔵)

選択された古医書を見ると、中国の伝統的知識(第1章, 第2章, 第3章), 日本の革新的臨床知識(第4章, 第5章, 第6章), 西洋の革新的臨床知識(第7章, 第8章)という三つの知識源泉に基づいて、江戸時代の日本医学の特徴をよく語っていることが分かる。各章は大体同じ手法で分析されている。古医書の著者、内容と構造が紹介された後、本全体に含まれている書き入れの字

数とその配列が挙げられ、さらにそれぞれのパージョンの手書きの書き入れが英語で翻訳されている。残念ながら、各医書の書き入れ全てが翻訳されているわけではなく、著者の都合により部分的に翻訳されている。その他、第1章及び第2章では本文の序が英語で翻訳され分析されている。第3章及び第6章では、書き入れに引用されている書物が挙げられているが、日本医書があまり引用されていないことについて著者は不思議に思っており、説得力ある説明がない。中国に対する日本医師の博大な知識とその忠実さを反映するものと見るべきだろう。また、その引用された医書の分析によって、すべての医書の書き入れは1760年から19世紀初頭の間には書き入れられたと著者は述べている。第7章では、『眼科新書』がオーストリア人ブレンキの名著の日本語訳であるので、ルカシュは『眼科新書』の書き入れを分析する前に、ブレンキの業績、彼の著作の内容と、19世紀日本における眼科の歴史を紹介する。第8章では、コロンビア大学所蔵の『医学正伝』の書き入れを課題としているが、コロンビア大学の都合により著者は原文のコピーを8頁しか入手できなかったため、他の章に比べて、この本の書き入れはあまり研究されていない。この章は省いた方が良かったかもしれない。

最後に、付録として著者は18世紀末京都の茶

屋におけるオランダ外科医と日本医師との虚構の対話を語っている。日本の医学に対する西洋人の興味の起原、中国と日本の古医書における秘伝、日本における西洋医学の伝播、日本と西洋医学の違い、林子平の事件、松平定信の政策、儒学の教育など、さまざまな話題にわたりながら、著者は読者に江戸時代後期の医学界の雰囲気を感じさせてくれる。

若干の翻訳上の問題が認められるとしても、本書は英文によるこれまでにない、中国と日本の古医書における手書きの書き入れを総合的かつ新鮮に紹介する書籍である。著者は言葉の障壁を越え、現存資料の比較調査を行いながら、欧文と和文の先行研究を引用し、十分な注釈を施しているため、日本の古医書を知らない読者にも江戸時代の医師がどのように医書から知識を得たかが総合的に理解できる。『産論翼』の書き入れの翻訳では、「医案」の例も挙げられており、当時の日本医師が理論的な知識をどのように自分の臨床に取り入れたかを考える上で興味深く、当時の医師教育に関する意義ある情報だと思われる。今後は、西洋と日本の古医書の書き入れについての詳細な比較研究も期待したい。

(ヴィグル・マティアス)

[Amsterdam: Wayenborgh, 2010, 21×30 cm, 234pp.]

## 秦 温信 著

### 『北辰の如く』

副題は「関場不二彦伝」となっている。著者の秦温信先生は札幌社会保険総合病院院長であり、北海道医史学研究会の幹事でもある。著者は2005年(平成17年)7月に『北国から、さわやかな風を』と題して出版している。今回はかねてから関場不二彦が執筆した『西医学東漸史話』に関心をもって調査研究をはじめたことがきっかけとなり、その成果といえるものが本書である。

関場不二彦(以下不二彦と略す)は帝国大学医

科大学を卒業、スクリバ外科医局で研鑽、区立札幌病院に赴任した。のちに北海道医師会、札幌市医師会の会長を兼務して地域医療の先頭に立ち活躍した。初代会長としてその功績を記念し、両医師会館に胸像がおかれ、歴代会長の写真のトップにかざれている。不二彦に関して過去に記述された主な著書・論文をあげると、1966年(昭和41年)に誕生百年を迎え、北海道医師会が中心となり、『関場理堂選集』を記念出版した。理堂は不